

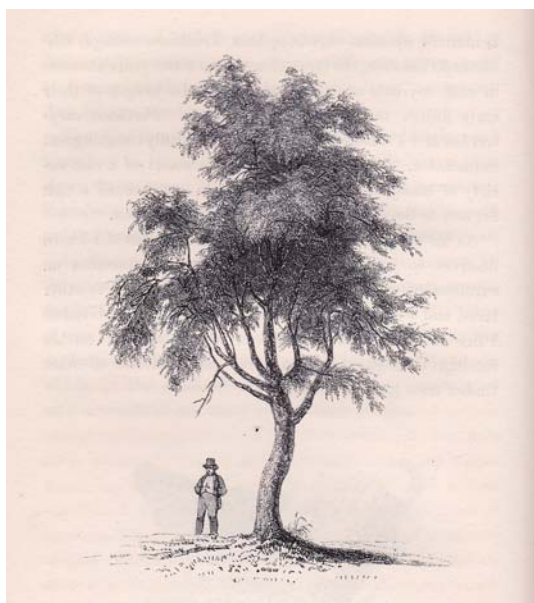
木の名の文化誌

クイック・ビーム（ナナカマド）について

ローワンとマウンテン・アッシュ

ナナカマドは現代の英国において一般にローワン (rowan) あるいはマウンテン・アッシュ (mountain ash) と呼ばれる。ふたつの名のどちらが多用されているか確かなことはわからないが、筆者の狭い経験では少なくともスコットランドにおいてはローワンと呼ばれることが多い印象を持つ。

ナナカマドは秋の紅葉が美しい。そして真っ赤な実もまことに艶やかである。欧州各地で普通に見られるナナカマドのラテン語による二名式学名 *Sorbus aucuparia* はこの赤い実に関わるものである。属名 *Sorbus* は実をつける低木の総称で、英語で *service tree* である。勿論この場合の英語 *service* はいわゆる兵役あるいは公益的事業などというサービスとは



一 ナナカマド セルビー『英国樹林史』（一八四二年）

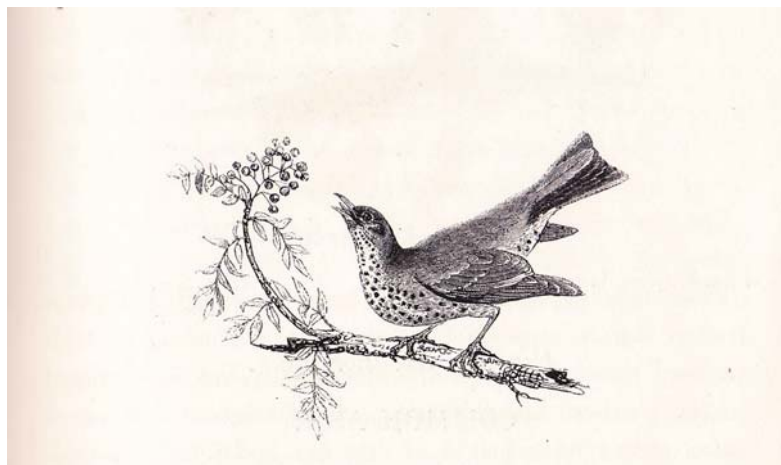
服部 昭郎

無関係の言葉である。日本語のグミも古くは赤い果実一般を指すことがあったようだが⁽¹⁾、*Sorbus* もこれに近い含意と考えてよいのではないか。

一方種名 *aucuparia* については、チャールズ・ジョンズ (Charles A. Johns 1811 - 1874) の『英国の樹木』(第九版一九〇三年筆者蔵)によると *auceps* (鳥刺し) に由来すると述べられている(一二七頁)。ナナカマドの実を餌に利用するツグミ鴉がドイツをはじめとする大陸諸地域で盛んに行われていたことに由来する名前であると言う⁽²⁾。

ナナカマドのラテン語による二名式学名をそのまま英語に翻訳すると *Fowler's service tree* となるが、実際にセルビー (Prideaux John Selby 1788 - 1867) の『英国樹林史』(初版一八四二年 筆者蔵) は「鳥刺しのサービス・ツリー」の名でナナカマドを呼んでいる⁽³⁾。

さて、ローワンの含意を考える際に参考になりそうなのが一七七七年に出版されたライトフット (John Lightfoot 1735 - 1788) の『フローラ・スコティカ』(筆者蔵) がナナカマドに与えている名 *roan* ではないだろうか⁽⁴⁾。詳細は省くとして、赤い色を示唆する。また一説によるとローワンはスカンジナヴィア系の言葉 *runa* に由来するとされるが、それは元来お守りあるいは魔



ツグミとナナカマドの実 セルビー『英国樹林史』(一八四二年)

二

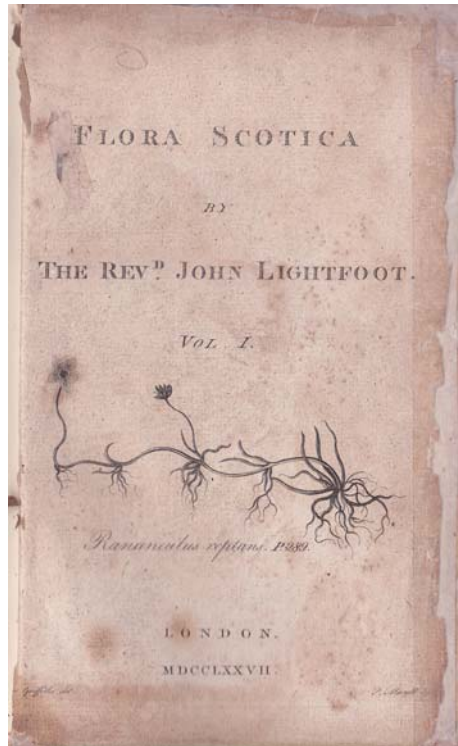
除けのこのようなものである⁽⁵⁾。後述するが、ナナカマドは欧州各地で古くから霊木として特別に敬われていることから考えると、赤い色とか魔除けの含意は大いにうなずけるところである。

ナナカマドはマウンテン・アッシュとも呼ばれるが、植物の分類としてはアッシュ(トネリコ)の仲間ではない。北欧神話において宇宙の中心をなす世界樹(ユグドラシル)はトネリコだと言われていたが、古来霊験あらたかと思え

られてきたナナカマドがマウンテン・アッシュと呼ばれるのとは関係はなさそうである。葉の形がよく似ているところからトネリコの名をもらっているだけだと言っているのはジョンズ(一九〇三年)である(一二七頁)。

しかしこのマウンテン・アッシュという名は言い得て妙で、ナナカマドの特徴をよく表している。ナナカマドは元来北国や比較的高い地域に自生する樹木である。マウンテン・アッシュという名は、他の樹木に比べ寒い地域あるいは高い土地によりうまく適応するナナカマドを先駆種(pioneer species)と考えることも十分可能であることを窺わせる名と言えるのではないだろうか。

名前の一部に自生する場所を示唆される植物は多いが、日本のナナカマドもそのうちのひとつのようで、ミヤマとかタ



ライトフット『フローラ・スコティカ』
(一七七七年) タイトル頁

カネを名の一部に持つことが白井光太郎著『樹木名考』（一九三三年 筆者蔵）に見える。また同書は地名を冠したナナカマドとして大峯ナナカマドあるいは富士山のフジキという名もあげているが、日本語でもナナカマドは高い山あるいは深い谷に生きる樹木としてその名を与えられているようである⁽⁶⁾。

山野に生きるナナカマドの姿は英国の詩人ワーズワース (William Wordsworth 1770～1850) によって次のように描かれており、マウンテン・アッシュの名の含意をそのまま伝えている。

見たことがあるだろう、

小さな流れのほとりや沼の近くに

ナナカマドが生きているのを、

樹下の水は照り映え、周囲の岩々は黒ずむどころか輝いて見える。

(ワーズワース「エクスカーション」第七節 七一九～七二二行 筆者訳)

ちなみにワーズワースはナナカマドをローワンではなくマウンテン・アッシュと呼んでいる。

神話の中のナナカマド

ナナカマドは英語でごく普通にはローワンあるいはマウンテン・アッシュなのであるが、それ以外にも、先の「鳥刺しのサーピス・ツリー」をはじめとして多くの別名を持つ。「トールを救った木」(Thor's Rescue あるいは Thor's Salvation) もそのひとつである。トールは北欧神話における「万物の父」オーディン (Odin) の息子のひとりで雷神である。またトールは Thor's day として英語の木曜日 (Thursday) の語源と考えられている名でもある。ただ、この

別名「トールを救った木」は北欧神話の一節に出てくる名前なので、元来は英語ではない。

「トールを救った木」ナナカマドのエピソードは「三世紀アイスランドの詩人スノリ・ストリソン (Snorri Sturluson 1179～1241) の遺した『散文のエッダ』(Prose Edda) にあるごく短い記述に見られる。筆者の手元にあるペンギン・クラシックス版の『散文のエッダ』北欧神話はジェシ・バイオック (Jesse J. Björck) による英語訳であるがそれを参照すると次の短い一節に出会う⁽⁷⁾。

岸边に流されたトールは、ナナカマドの枝につかまり川からはい出すことができた。これが「トールを救った木」の由来である。(九一頁 筆者訳)

エピソードの発端は北欧神話中のトリックスターとして特異な存在であるロキがトールに嘘をつくことである。ロキはいわゆる変身術を使う異能のいたずら者である。ある時鷹に変身したロキは空を飛んでいたが、はからずも巨人ゲイルロドに見破られ捕われてしまう。ゲイルロドはロキの命を助ける交換条件として「ハンマーも力帯も持たない」トールをゲイルロドの館に連れて来るように命じたのであった。トールの力の源はハンマー、力帯そして鉄の手袋であったので、ゲイルロドは言わばほとんど丸腰のトールをおびき寄せようとしたのであった。命じられるまま神々の住まいするアースガルドに戻ったロキはトールには本当のことを告げないまま旅に誘うのであった。

途中、グリッドという女巨人の家に泊まる。そこでグリッドはトールに本当のことを語り、彼女の「力のベルトと鉄の手袋、そして杖」を貸し与えたのであった。しかしヴィルム河を渡ろうとすると、河が突然増水してトールとロキは溺れそうになる。実はゲイルロドの娘ギャルプのしわざだった。トールは石の塊を手を取ってギャルプにそれを投げつけたのでギャルプは退散。しかし流れの勢いはいっこうに収まらず、足を取られ岸边に流されたその時一本のナナカマドに手がかかったのであった。そして先に引用した一節が続いているのである。トールとロキそして巨人ゲイルロドの戦いは続く

のであるが、それは省くとして、以上が「トールを救った木」を巡るエピソードの顛末である。

筆者が参照している英語訳『散文のエッダ』の訳者バイオックは「トールを救った木」に注を付け、「ナナカマドは聖なる樹としてトールと関連づけられる」としている（二四九頁）。この北欧神話においてはナナカマドは河で溺れかかった雷神トールを救う不思議な霊力を持つ樹木となっているのである。雷神を救うナナカマドの霊力も実は雷の力であったことはナナカマドのもうひとつの名前「空飛ぶナナカマド」によつてはつきりするであろう。

空飛ぶナナカマド

「空飛ぶナナカマド」(Flying Rowan)と呼ばれるナナカマドがある。ジェイムズ・フレイザーの『金枝篇』(The Golden Bough)⁽⁸⁾には「空飛ぶナナカマド」が概略次のように記述されている。鳥がナナカマドの実を食べた後種をいろいろな所に運びそれが芽を出す。ごく普通の土地から芽を出すほか、岩の小さなくぼみに落ちてそこで芽を出す種あるいは屋根の上や時には他の樹木のでっぺんからまるで接ぎ木したように芽を出す種などいろいろである。「空飛ぶナナカマド」は大地で芽を出すナナカマドではなく、岩、屋根あるいは他の樹木など特別の場所で芽を出すナナカマドを指す言葉である。特別というのはつまり地上ではないという意味である。北欧ではこの「空飛ぶナナカマド」が魔除けとして特別の霊的パワーを持っていると信じられていた。例えば暗い中を外出する際、「空飛ぶナナカマド」の枝を口に含む。そうすれば悪魔に取り憑かれて身動きできなくなることもないと信じられていた。ユトランド半島においても同様の俗信があつて、復活祭から四〇日目の聖なる木曜日つまりキリストの昇天日に採集された「空飛ぶナナカマド」は特に靈験あらたかと言われていた(岩波文庫版 第五卷 一二〇～一二二頁)。

この「空飛ぶナナカマド」は鳥が運んだ種が大地で芽を出すのではなく、岩や屋根あるいは樹木上で芽を出すものだけを指すのだが、空中つまり天と地の中間で芽を出す植物への古代人の素朴な畏怖の念が言葉の根底にあることは間違いない。

フレイザーが『金枝篇』で「空飛ぶナナカマド」に言及しているのは、『金枝篇』の主要テーマである金枝ニヤドリギ論の文脈において、寄生植物が様々な病気に薬効があると古代人に信じられていたことについて述べた件である。ドルイドたちが崇拝したヤドリギはオークを宿主として寄生する植物、つまりこれも天と地の中間で生きる不思議な植物であったのである。植物の寄生という命の営みは古代の人々にとって不思議な霊力の象徴であった。そして彼らは寄生植物ではない「空飛ぶナナカマド」にも同種の命の営みを見たというのがフレイザーの文脈であった。

ところで白井光太郎（一九三三年）はヤドリギをホヤの名で項目としてあげている。そして説明の中でひとつの別名トビツタを紹介している。このトビもフレイザーの文脈と同じで天と地の中間に生きるという含蓄ではないだろうか⁽⁹⁾。

ナナカマドに関しては、白井光太郎（一九三三年）にさらに興味深い指摘が見られる。ナナカマドの項では文化一〇年刊『増補花壇大全』（二八—三三）からの引用があり、「此の木も雷（らい）を除く、徳有りて軒近く植る」となっている⁽¹⁰⁾。いわゆるライデンボクと呼ばれる雷除けの木を念頭においた記述であろう。フレイザーは雷火除けに、オークに宿るヤドリギを採集して束を作り、家の中に吊るす北欧の故事に言及しているが（岩波文庫版 第五卷 四五頁）、このヤドリギの束が雷を除ける力を持つと信じられるように至った経緯の中で、ヤドリギを称して「雷箒」（thunder-besom）というスイスの言葉を紹介している。ヤドリギが雷によって生じたものと考えていた人々の存在に注目しているのである。彼らは天と地の中間に生きるヤドリギこそ雷火の力を内部に貯蔵していると信じていたので「雷箒」という名を考えたのである。天と地の中間で芽を出した「空飛ぶナナカマド」も同様に雷火の力を内包していると考えられたのである。

フレイザーの考えでは、家の中に吊り下げられたヤドリギの束は避雷針のような働きをするものだとしている。つまりヤドリギの雷除けの霊験は、北欧神話において雷神トールが溺れそうになった時に彼を助けたのがナナカマドであったように、雷から授かった力そのものに他ならないのである。言わば雷の力と同じ力を貯えたヤドリギあるいは「空飛ぶナナカマド」が雷を除けるのであった。古代人にとって恐ろしい雷火は神のものであったことは改めて言うまでもない。

ナナカマドに雷火の力が宿っているとする俗信はナナカマドを燃やして魔除けとする風習に色濃く残されている。その

風習を伝える昔話がトロッター (Robert Trotter) の『ギャロウェイ・ゴシップ』(一八七七年) に集められているスコットランド・ギャロウェイ地方の昔話のひとつにある。物語はいわゆる妖精による子どもの取り替えをめぐるもので、概略次のようである⁽¹⁾。

ソービー村にジェミーとベギーという夫婦が住んでいた。この夫婦には子供がひとりあったが、この子は四六時中泣き叫び、どんなにあやしても効果がなかった。思いあまつたベギーはカーキナーに住むラッキー・マクロバートというおばあさんに助けを求めたのであった。一緒にきた男の子は気が狂ったように泣き叫んだ。すると男の子をじっと睨んでいたおばあさんが「静かにおし。泣き止まないと煙で燻してしまふよ」と言うと言の子は突然静かになったのであった。ベギーはおばあさんに六ペンス払い、喜んで家に帰った。その後かなりの間、子供が泣き叫ぶとベギーがおばあさんの言ったように「静かにおし。煙で燻すよ」と言うと言の子は羊のようにおとなしくなるのであった。

しかしその言葉も次第に効き目がなくなってきた。再び言うことを聞かなくなり泣き叫ぶ子供を前にベギーは途方にくれるばかりであった。ちょうど子供が三歳になった頃、夫のジェミーも我慢ができず、十月のある夜、マクロバートおばあさんに再び助けを求めたのであった。するとおばあさんはジェミーに向かって次のように言うのであった。「この子はお前さんたちの子ではない。妖精が取り替えた子なんだよ。もしお前さんたちが怖い目にあってもいいと言うのなら本当の子どもを取り返してあげるよ。」

おばあさんの言うことに驚いたジェミーは何でもするから是非子どもを取り返してほしいとおばあさんに頼んだ。するとおばあさんは、ナナカマドの薪を用意して、ハロウインの九時になったらピートに火をつけておくように言うのであった。そして穴のあいた石(魔除けとして珍重されていた筆者)と背の高い蠟燭立て、篩(ふるい)もひとつ、以上を用意するようにとも言うのであった。おばあさんに対してジェミーは言われたとおりにすると約束した。そして子供には準備を気づかれないよう気をつけた。

ハロウィンがやってきた。準備はすべて整っていた。九時少し前であったが、マクロバートおばあさんが姿を見せ、一言も言わずに戸をびしゃりと閉めたのであった。ふたつのスツールの真中に、当時よくおこなわれたように水砥石で炬となる場所を作り、ジェミーとペギーをそれぞれのスツールに座らせて、おばあさんは蝋燭に火を点した。そして床の上に敷かれた水砥石の上でナナカマドの薪を火にくべはじめたのである。

その光景を見た子どもは恐怖にとりつかれたように逃げまわったがおばあさんは持参した赤い布紐で子どもの手足を縛り付け、用意してあった篩に子どもをつっこんで燃えるナナカマドの上にかざすと煙で息ができなくなった子どもは篩の中でさらにあばれはじめるのであった。

すると戸口で誰かがノックする音がした。しかし子どもが泣き叫びながら暴れていたので誰も気に留めようとはしなかった。その時である、子どもはギャーと叫びながら篩から飛び出し、煙の渦巻きとなつて煙突から外へ消えてしまったのであった。家の中は急に静まり返ったが、再び戸口で誰かがノックしているのが聞こえた。おばあさんが戸を開けると男の子がひとり佇んでいた。「お前は誰なんだい？」とおばあさんが聞くと「ただいま、タミーだよ」と子どもは応えたのであった。

部屋に入ってきた子供は妖精のように見えたが、おとなしいよい子で訳も無く泣いたりしなかった。ジェミーとペギーは大喜びで、おばあさんには礼としてジェミーが老後のためにと蓄えていた半ギニーを与えたのであった。かわいい子が戻り、ジェミーとペギー夫妻にはもうお金など必要ないと思えたのであった。

生と死の境界樹

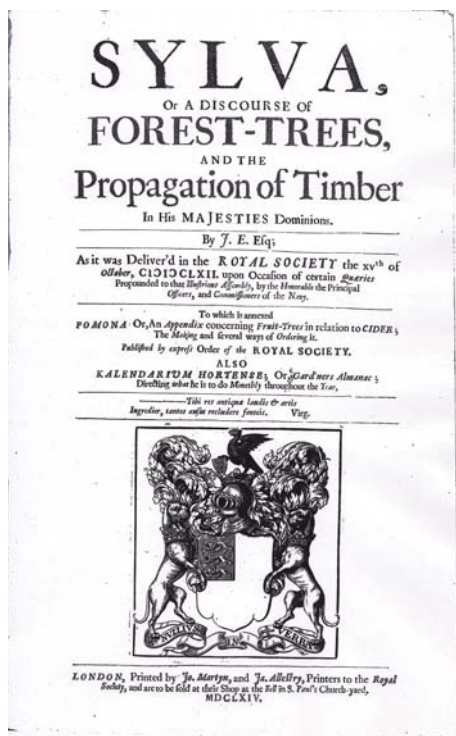
ジョン・イーヴリン (John Evelyn 1620～1706) は、チャールズ二世の王政復古期英国の政治や社会の動きを克明に記した日記を遺したことで夙に名高い文人である。同時に彼は植物、特に樹木についても造詣が深い科学者として、

一六六〇年に創立された英国科学史上最古の学会である王立協会 (Royal Society) の中心メンバーのひとりでもあった¹²⁾。科学者イーヴリンの仕事として最も重要なものは、当時を代表する樹木誌『シルヴァ』を著したことであった。シルヴァとは文字通り森のことであるが、樹木の増やし方あるいは育て方そして用途などを樹木別に記すことを主たる内容とするいわゆる Arboriculture (林学) 書である。それは王立協会が発行した最初期の書物のひとつでもあった。

国立国会図書館 (東京館) に所蔵されている一六六四年初版を見ると、ナナカマドも短いながらその一節を与えられている。ただイーヴリンがナナカマドに与えた名はローワンではなくまたマウンテン・アッシュでもなかった。それはクイック・ビーム (Quick-beam) という名であった。最後に本論の主題クイック・ビームへ接近したい。

ビームは古い英語で樹木一般を指しており、ドイツ語のお菓子の名前バウムクーヘンのバウム (baum) と語源は同じである。また今日の英語では Hornbeam (シデ) や Whitebeam (アズキナシ) などという木の名に残っている。我々にとって興味深いのはクイックの方であるう。

クイックは基本的に速いことを意味している。つまりスロー (slow) の反対である。そこでクイック・ビームを発芽が速い木あるいは成長の速



イーヴリン『シルバ』(一六六四年)
タイトル頁 国立国会図書館蔵

い木と理解しようと思えばできなくはない。実際「空飛ぶナナカマド」で述べたように、岩や屋根あるいは他の樹木上に比較的容易に根付くナナカマドを発芽が速い木と呼ぶことにそれほど違和感はないのではないか。他の樹木に比べ高い土地あるいは寒い地域によりうまく適応するナナカマドを先駆種と考えることも十分可能であることは先述の通りであるが、その点から速く適応する樹木という名を考えてもおかしくない。ジョンズ（一九〇三年）もナナカマドの若木は実際成長が速いと述べている（二二八頁）。また今日英語で *quick grower* と言えば成長の速い植物一般を指す。ところがクイック・ビームの場合、ことはそれほど単純ではなさそうなのである。

オックスフォード英語辞典はナナカマドの英語の別名クイック・ビームについて、このクイックの原義は明らかではないとする立場に立つ。しかしナナカマドをクイック・ビームと呼び、この木の特徴について述べるイーヴリンを読む限り、芽吹きや成長が速いという意味ではない別の含蓄が背後に潜んでいるように筆者には思えるのである。

『シルヴァ』は著者イーヴリンの生前には第四版まで刊行されているが、国立国会図書館が所蔵している初版（一六六四年）におけるナナカマドの記述は後の版でかなり加筆されている。テキストの異動の検討も含め、ここで参照するのは生前最後の第四版（一七〇六年）で、その第一五節がナナカマドである。イーヴリンはそこでこう語っている。

まず弓の材としてイチイに次ぐ良材であること、薪としても重宝であること、花の香りもよくその上実は発酵させて飲み物¹³にすると気鬱や壊血病によく効く薬となること、そしてウェールズでは実を使つてビールなども醸造すること等々、我々もすでに知っているナナカマドの用途をひと通り述べた上で最後にきわめて注目すべきことにふれているのである。

ウェールズではナナカマドは聖樹として崇拜されており、この木が植わっていない教会墓地はないほどである（イングラランドではイチイの木であろうが）。毎年決まった日にナナカマドで作った十字架を祈りのため身につける。一部の専門家たちはこの木をラテン語で *Fraxinus Cambro-Britannica*（ウェールズのトネリコ）と呼んでいる。魔除けとして

信じられていた。だからであろうか、イングランドでナナカマドが魔女の木 *witchen tree* と呼ばれることがある。細い枝が家の周りに突き立てられたりする。また太い枝は杖にもなる。

ここでイーヴリンの言う「家の周りに突き立てられたナナカマドの枝」あるいはナナカマドで作った「杖」などは、実用的な用途を述べているばかりではなく、何らかの俗信を背景とした霊木ナナカマドの使われ方に言及していると思われる。家の周りの細いナナカマドの枝とは魔除けあるいは雷除けの風習について述べているのである。生きたナナカマドが庭に植えられることもあるなど様々な災難除け風習が伝えられている。

またイーヴリンの言うナナカマドの杖は、牛を邪気から守るために酪農家に使われたナナカマドの枝の杖などを言うのみでなく、ドルイドたちがトネリコの杖を持っていたと伝わるのと同じ文脈で、キリスト教以前の古代の聖職者たちが魔除けあるいは権威を象徴するものとして持っていたと伝わるいわゆる職杖をも念頭においているものと推測される。

さてイーヴリンの指摘によると、ウェールズではナナカマドはイングランドのイチイと同じように教会墓地を象徴する樹木でもある。教会墓地にイチイを植える風習については別の稿とさせていただくとして、ここでは教会墓地に植ええられる聖なる樹木のひとつナナカマドをイーヴリンがクイック・ビームと呼んでいることについてさらに考えを巡らせてみたい。速さを主たる意味とする言葉クイックに戻ろう。

クイックは形容詞であるが、動詞に活用するとクイックン (*quicken*) である。そしてこの動詞は当然のことながら速くなるの意に変化するのであるが、クイックンはこれとは別に我々には興味深いまったく別の意味で使われることがある。それは妊婦がはじめて胎児の動きを子宮の中に感じた時に使われるのである。つまりはじめての胎動である。日本で出版されているごく普通の英語辞書でもその用例は出ているから使用頻度もそれほど低くないことが推測される。そしてこの語義についてオックスフォード英語辞典は「子どもが命のサインを送る妊娠の段階」としている。そして最初の胎動を命のサインとする動詞クイックンの語義は実は形容詞クイックの原義から派生しているのである。クイックという形容詞は、

現在ではほとんど使われることはない意味として、もともと「生きている状態 (alive)」を指していたのである。例えばこのクイックの用例としてオックスフォード英語辞典は聖書の「使徒言行録」(一〇章四二節) から「生きている者と死んだ者」(quick and dead) をそのひとつにあげているのである。

オックスフォード英語辞典では、今日ほとんど忘れられている語義「生きている状態」を、クイックの持つ多数の語義の先頭において説明している。つまりオックスフォード英語辞典におけるクイックの語義説明の組み立てからすると、体の動きが速い、頭の回転が速い等々、今日我々が普通に知っているクイックの主なる語義が「生命力が豊かで生き生きしているので、動きが活発で素早い」という原義から派生したとする考えが根幹にあるように推測される。今日では形容詞クイックが「生きている状態」を指すことはほとんどないが、動詞クイックンには生きているサインを感じるという意味でそのもともとの意味が残っているのである。

さて、イーヴリンはウェールズではナナカマドを教会墓地に植える風習があると言っている。イングランドではその役目をイチイが担うのであるが、勿論ウェールズの教会あるいは教会墓地にもイチイが植えられていることはコーニツシュ(一九四六年)によって明らかであるから⁽¹⁴⁾、イーヴリンの言うところはイチイと共にナナカマドも植えられているという意味であろう。

墓地に植えられているイチイは常緑の聖樹として死者の霊の永遠を象徴していると言われるが、ウェールズの教会墓地にイチイと共に植えられるとイーヴリンが指摘しているナナカマドは落葉樹である。常緑樹と落葉樹、まことに対照的と言わざるを得ないが、ナナカマドが教会墓地に植えられる風習において、実はそれが落葉樹であることが大変重要な意味を持っているのである。そしてそのことがイーヴリンがナナカマドをクイック・ビームと呼んでいることと深くかわっているのである。

ここで我々は古代ケルト社会の人々の暮らしに目を向けて見ることにする。植物との関連で特に彼らの暦に注目してみたい。古代ケルトの人々の一年は暦の上で太陽に恵まれない半年と恵まれる半年に二分されていた。暗い半年の始まりは

一月一日（ケルトの人々は一日は夜から始まり夜に終わると考えていたので、それによれば十月三十一日ということになる）である。すなわち今日ハロウィンとして欧州に残っている祝祭日で、ケルト社会ではサウイン祝祭と呼ばれていた。三ヶ月のサウインの間に冬至を過ぎ、かすかに春の兆しを感じる時期である二月一日にはインボルク祝祭となる。インボルクの三ヶ月には春分がある。そしてそれを過ぎて五月に入ると暗い半年に終わりを告げ、明るい半年の始まりとなる。その祝祭がベルテン祝祭である。これがキリスト教社会となった後もメイ・デーあるいはメイ・ポールとして残った祝祭である。夏至を過ぎ、四つの祝祭の最後として八月一日のルナッサ祝祭へと続く。

以上のように四つの祝祭によって四分割される一年がケルト歴の基礎であるが、ケルトの民はそれに重なるように樹木暦も持っていたと伝えられている。すなわち、暗い半年の始まりを告げるサウイン祝祭の木はリンボク（Blackthorn）、明るい半年の初めはベルテン祝祭でヤナギ（Willow）がそれを象徴した。そしてナナカマドは二月一日のインボルク祝祭を含む暗い半年二番目の月の木であったのである。

二月一日のインボルク祝祭では人々は春の兆しをかすかに感ずると述べたが、勿論実際の季節の推移とは必ずしも一致していないだろう。地域差も大きいものと思われる。例えばナナカマドが香しい白い花を一齐に咲かせるのはスコットランドでは五月になってからであったと筆者は記憶している。もっと早く花をつける地域もあるであろうし、もっと遅い地域もあるであろう。アイルランドあるいはブリテンの島々等がケルト社会の北限であったことはよく知られているが、その北国においてインボルグ祝祭日を中に挟むナナカマドの月がなぜ春の兆しを感じる始まりとされるのであろうか。

それにはいくつかの背景がありそうである。まず第一には自然の推移それ自体である。冬至を過ぎ、日一日と長く太陽の恵みを人々が実感したことは間違いない。インボルク祝祭をキリスト教社会が引き継いだ聖燭祭（キャンドル・マス）では、ブランドの『英国故事録』（一八四九年 筆者蔵）によると、それぞれ蠟燭を手にした信者達が教会に祈りを捧げにやってくる風習があるが、恐らくこの蠟燭の灯火が日ごとに長く照る太陽を象徴するとともに春へのさらなる接近を願った古代ケルト社会の人々の期待を象徴的に受け継いだ風習なのであろう¹⁵⁾。

さらにブランド（一八四九年）はこの聖燭祭を描いたものとして一七世紀のイングランドの詩人ロバート・ヘリック（Robert Herrick 1591 - 1634?）が遺した「聖燭祭イヴのならわし」（Ceremonies for Candlemas Eve）を引用している。詩には伝統的な教会の祝祭日それぞれに飾る緑の草木が紹介されているが、聖燭祭はツゲ（Box）が飾られるとされている。聖燭祭が季節的には真冬の祝祭であるにもかかわらず暦の上では春の兆しを告げる祝祭であることは、その日（クリスマス暦では二月二日）にクリスマスに教会を飾った木々を片づける「ならわし」に端的に現れている。

ローズマリーと月桂樹を片付けよ、

ヤドリギを片付けよ、

ヒイラギにかわつて緑鮮やかな

ツゲを高く飾り付けるのだ。

（筆者訳）

『ロバート・ヘリック詩集』（オックスフォード大学出版局一九六八年 二八五頁）

クリスマスに教会あるいは家庭を緑の草木で飾り付ける風習についてブランド（一八四九年）はキリスト教以前の人々の植物霊に対する崇拜の名残であろうと言っている（第一巻 五一頁～五二五頁）。その具体的な草木については、まさにヘリックが詩の冒頭で言及しているローズマリー、月桂樹、ヤドリギそしてヒイラギの名をあげている。各地各様の飾り付けの習わしや言い伝えがあったものと推測されるが、ブランドの言うように、それらの多くはキリスト教以前の社会から伝わるものであったのである。

クリスマスや聖燭祭それぞれの祝祭を飾る草木がヘリックの詩の中で時の巡りとして描かれているが、古代ケルト人のインボルク祝祭を継承しているキリスト教会の聖燭祭も暦の上で春を感じる祝祭であったのであろう。ケルトの民は一日

の始まりを夜からと考えていたが、これは季節の移り変わりにも適用され、春も実際にはまだ寒い二月にその兆しがあると暦の上で信じられていたのである。クリスマスに飾られたローズマリーらの植物に替わって聖燭祭に新たに続くのはツゲであるように、ヘリックの詩ではそれぞれの季節の兆しが永遠の時の巡りとして描かれているのである。デヴォンの国教会聖職者でもあったヘリックならではの作風であると言える。

さらに、インボルク祝祭はケルト神話の女神ブリギッド (Brigit) に捧げられる祝祭であった。このこともインボルク祝祭が春の兆しを告げるものと信じられたひとつの背景となっているのである。女神ブリギットは別の名をダナ (Dana) ともいうが、「女神ダナを母親とする人々」(トアハ・デ・ダナン Tuatha De Danann)こそケルト神話でダナン神族と呼ばれる神々であった。ケルト神話における女神ブリギッドは六世紀アイルランドのキリスト教会における聖ブリジット (St. Bridget) とされることもある。

さらにブランド (一八四九年)によると、全能の異教神ダグダ (DagdaブランドではDaghaと記述されている)の娘である詩人にして女神でもあるブリギッドの祝い事はアイルランドの聖ブリジット (キルデアの聖ブリジット St. Brigit of Kildara)の祝日に受け継がれているが、それはキリスト教以前の風習が色濃く残るものであり、「農婦たちが特別に干しぶどう入りパンを焼き、近隣の人々は集まってエールを飲んだり音楽を奏でたりのお祭り騒ぎである」とも述べている。

女神ブリギッドはケルトの民にとっては様々なものの守護神であったが、ブランドの報告でインボルク祝祭を受け継いだキリスト教会の聖燭祭におけるパンや酒の言及があるように、食べ物を守ってくれる女神と信じられていた。また家畜の守護神でもあった。つまり生命あるいは豊穡の守護神であったのである。女神ブリギッドが特に家畜の守護神であったことは、二月には子羊が生まれる自然のサイクルと符号している。インボルク祝祭そして聖燭祭は新しい羊が生まれ、親羊が授乳を始める季節の祝日でもあったのである。

以上のような様々な理由によってインボルク祝祭はブリテンの島々がまだ氷に閉ざされた極寒の気候であるにもかかわらず

らず春の兆しを古代のケルトの民に感じさせたのであった。

そしてここで我々は再びナナカマドの英語の別名クイック・ビームに戻る。特にクイックから動詞に活用したクイックンが、妊婦が子宮の中で初めて胎児の動きを感じる意味があることを思い出したい。

ケルトの木の名において是一年のうち太陽に恵まれない暗い半年の第二番目の月の木がナナカマドであった。そしてナナカマドの月にはインボルク祝祭（二月一日）が含まれているのである。

つまり、クイック・ビームという別名は、妊婦がはじめて胎児の動きを感じる動詞クイックンの含意を基本に、それを季節の移り変わりに適用させた名ではないだろうか。人間の場合、早い人で妊娠一八週頃、遅い人でも二二週頃には胎動を感じ始めるといふことなので、はじめての胎動は妊娠期間のいたい半ば前後に感じられるということであろうか。

ちなみに、イーヴリンは『シルヴァ』（一六六四年）において形容詞クイックを他の箇所でも次のように使用している。初版の第二十節は「生け垣」となっているが、その中で生け垣あるいはそのための苗木を指示する言葉としてクイック・セット (quickset) を使っているのである。この言葉は現代においても通用している園芸用語であるが、このクイックは「速い」の意ではなく文字通り「生きている」である。『シルヴァ』におけるクイックの用例はこのクイック・セットが最も多いが、他に樹木を「剪定する」に近い用例として trim and quicken が見られるが、これなども活発に「生きている」状態にするという意味であろう。イーヴリンの以上のようなクイックあるいはクイックンの用例からも、これらが「速い」を意味している可能性は低いと言えるのではないだろうか。

ケルト暦の暗い半年はサウイン祝祭（ハロウィン）から始まる。そしてその暗い半年はベルテン祝祭によって終わりを告げ、明るい半年が始まる。つまり暗い半年のちょうど真ん中にインボルク祝祭が位置するのである。ここに木の暦を重ねて見ると、ナナカマドの月は暗い半年のちょうど真ん中にある月なのである。ここにおいて、母親の子宮の暗闇から胎児が初めて命のサインを送ることと、ケルト暦のナナカマドの月が暗い半年のちょうど真ん中にあたり、春の到来の兆し

を人々に告げることが重なるのである。

ナナカマドの英語の別名クイック・ビームは新たな命の胎動を含意とするのではないか。しかもその胎動は誕生を前にしてまだ暗闇に閉じ込められている命が発する初めてのサインなのである。イーヴリンがウェールズの教会墓地には必ず植えられていると指摘したクイック・ビームが象徴するものはヘリックの「聖燭祭イブのならわし」の言葉を借りて言えば、「新たなものが次に続く」自然の摂理なのではないだろうか。

ジョン・イーヴリンが『シルヴァ』（第四版 一七〇六年）の中で、ウェールズのキリスト教会墓地に植えられているシンボル・ツリーがイチイとナナカマドであると述べているところから我々はナナカマドの象徴について考えを巡らせて来た。そしてナナカマドが一方の常緑樹イチイと対照的な落葉樹であることに注目してきた。つまり常緑のイチイが死者の霊の永遠を象徴しているとするならば、ナナカマドは、落葉樹として、ヘリックの詩のテーマでもある、死ぬものと生きものの交代を象徴しているのではないだろうか。そしてその交代が永遠に続く意味において転生を落葉樹ナナカマドが象徴しているのである。その象徴するところがナナカマドのひとつの名クイック・ビームの含意ではなからうか。

注

(1) 深津正『植物和名の語源』一九九九年 八坂書房 二四六頁。

(2) ジョンスはイングランドのプリマス生まれの教育者であり、動植物に関する啓蒙書を多く著している。『英国の樹木』(*The Forest Trees of Britain*) は彼の代表作のひとつで一八四七年に出版され、後に多くの改訂版も出されている。筆者の手元にある版は著者ジョンスの死後三〇年ほど経過した一九〇三年に出版された第九版である。『英国の樹木』に関する出版の歴史などははっきりと把握していないが、一八九九年には第八版が出されているところから推測すると人々の間でよく読まれていたようである。

『英国の樹木』は樹木の植物学的な記述もさることながら、樹木が人々の暮らしとどう関わっているかに関心を向け、歴史的、文化的な側面から樹木へアプローチしている言わば樹木のフォークロアである。挿入された多くの版画挿絵も美しい。その中に

Whimperの名が刻まれた作品がいくつかあるが、この人物は『英国の樹木』の出版元キリスト教知識普及協会の出版物のいくつかに版画を提供している版画家ジョサイア・ウッド・ウインパー (Josiah Wood Whyper 1813～1903) のことであろう。以下本論では『英国の樹木』あるいはジョンズ (一九〇三年) で示す。

- (3) セルビーはイングランド北部ノーサンバランドを流れるアルン河南岸に位置するアニック出身のナチュラリスト。鳥の研究でも名を馳せているが、『英国樹林史』(A History of British Forest-Trees) もセルビーの代表作である。初版 (ロンドン John Van Voorst 刊) は先のジョンズの『英国の樹木』初版より五年先 (一八四二年) に出ている。ジョンズの書物は啓蒙的であるが、セルビーの作品も同じような性格を持ちつつも樹木へより自然科学的視線を向けている。美しい版画挿絵も多く、この点でもジョンズの『英国の樹林』とよく似ている。筆者が今回参照しているのは初版 (一八四二年) である。以下本論では『英国樹林史』あるいはセルビー (一八四二年) で示す。

ちなみに、セルビーはナナカマドの名について、ローワンは方言 (provincial) であるとしている (七六頁)

- (4) 『フローラ・スコティカ』(Flora Scotica) は一七七七年初版 (ロンドン B. White 刊)。著者のジョン・ライトフットは一七三五年イングランドの都市グロスターの北西部にあるニューエントに生まれた国教会牧師である。有名な旅行家トーマス・ペナントと共に一七七二年スコットランドを旅行、その時の知識と経験を元に『フローラ・スコティカ』をまとめた。『フローラ・スコティカ』は二巻本で、第二巻末尾のインデックスを含むと総頁数一七六頁におよぶスコットランド自然誌である。その内、最初の六六頁がスコットランドの動物についてペナントが書いたもので、それに引き続きライトフットの植物編となっている。鳥や樹木あるいは草花などの多数の挿絵を描いたのはペナントらとスコットランドを一緒に旅したモーゼス・グリフィス (Moses Griffiths 1719～1819) で、それを元に銅版画としたのはピーター・マゼル (Peter Mazell) たちであった。筆者の手元にある版は一七七七年の初版である。以下本論では『フローラ・スコティカ』あるいはライトフット (一七七七年) で示す。

ライト・フットの生涯あるいはペナントに同行したスコットランド旅行の詳細については、以下の書物を参照している。

- (5) Jean K. Bowden, *John Lightfoot: His Work and Travels* (The Bentham-Moxon Trust, Royal Botanic Gardens, Kew, 1989).
リーダーズ・ダイジェスト『プリテンの樹木ガイド』(一九八一年) ナナカマドの項参照

- (6) 白井光太郎『樹木名考』昭和八 (一九三三) 年 内田老鶴圃 (筆者蔵)。以下本論では『樹木名考』あるいは白井光太郎 (一九三三)

年)で示す。

- (7) Snorri Sturluson, *Prose Edda: Tales from Norse Mythology*, trans. by Jesse L. Byock, Penguin Classics (2006).
 (8) ジェームズ・フレーザーの『金枝篇』(簡約本一九二二年)は、永橋卓介訳岩波文庫版(全五巻)が昭和二六(一九五一)年に翻訳刊行されている。筆者が参照しているのはその昭和四八(一九七三)年版である。なお、訳出された版である一九二二年の簡約本 *The Golden Bough, A Study in Magic and Religion: Abridged Edition* もリプリント版で併せ参照した。本文中では特に指示しなければ、(岩波文庫版)を示す。

- (9) 永橋訳の『金枝篇』においては、「空飛ぶナナカマド」ではなく「トビナナカマド」と訳されている。

- (10) 松本新助他『増補花壇大全』全十六巻 文化一〇(一八一三)年刊。国立国会図書館デジタルコレクション蔵を参照。

- (11) Robert Trotter, *Galloway Gossip Sixty Years Ago*, Published by R. Trotter 1877 参照。この書物は一八七七年に出版されているが、タイトル頁に著者として Maria Trotter 及び編者として Saxon という名があげられている。これは本当の作者である外科医 Robert Trotter の意図による何らかの偽装であると考えられている。因みにマライアはロバートの母親の名である。

- (12) John Evelyn, *Sylva, or A Discourse of Forest Trees, printed by John Martin for the Royal Society, 1664*. 一六六四年の初版は国立国会図書館蔵。本論執筆においては初版以外にイーヴリン生前の最後の版となった第四版(一七〇六年)を二〇世紀初頭にアーサー・ダブルデイ社から出た二巻本リプリント版(筆者蔵)によって参照した。当該リプリント版は一九〇八年出版という情報が流布しているが、書物の刊記には出版年が示されていない。

第四版リプリント版には、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて森林や樹木に関する著者を残したジョン・ニスビット (John Nisbet 1853 ~ 1914) による「イーヴリンの生涯と著作」という「序論」がついている。その中でニスビットはイーヴリンの生涯をごく簡潔に記し、その上で、英国における樹木栽培の歴史において彼の生前及び死後二百年に渡って、イーヴリンほどの影響力を持った人物は他にいないと言っている(「序論」12v頁)。このニスビットの言うイーヴリンの死後「二百年」という言葉が、右の第四版リプリント版出版年が「二〇世紀初頭」と推測される根拠であるが、今の所これ以上正確な出版年を裏付けるものはない。

なお、イーヴリンの『シルヴァ』出版三五〇年を記念して二〇一四年に出版された『ニュー・シルバ』も参照している。G

Hemery and S. Simblet, *The New Sylva: A Discourse of Forest and Orchard Trees for the Twenty-First Century* (Bloomsbury, 2014).

(13) ジョーンズ（一九〇三年）もイーヴリンのこの部分を引用している。洋梨を発酵させて作る酒はベリーと呼ばれるが、ジョーンズはこれがイーヴリンの言うナナカマドの飲み物の味によく似ていると言っている（一三二頁）。

(14) ヴォーン・コーニッシュ (Vaughan Cornish 1862-1948) による『教会のイチイと不死』参照。Cornish, *The Churchyard Yew and Immortality* (Frederick Muller, 1946)（筆者蔵）。

(15) John Brand, *Observations on the Popular Antiquities of Great Britain*, 3 vols. (Henry G. John, 1849)（筆者蔵）。聖燭祭について、は第一巻四三頁～五一頁を参照。以下本論では『英国故事録』あるいはブランド（一八四九年）で示す。

参考文献

（注）の中で示した文献以外で主なるものを以下に記す。

北欧神話

『エッタ古代北欧歌謡集』谷口幸男訳 一九七三年 新潮社。

エリス・デイヴィッドソン『北欧神話』米原まり子・一井知子訳 一九九二年 青土社。

クロスリ・ホランド『北欧神話物語』山室静・米原まり子訳 一九九一年新版 青土社。

ヤン・ブレキアン『ケルト神話の世界』田中仁彦・山邑久仁子訳 一九九八年 中央公論社

樹木と樹木信仰

Anderson, Mark L., *A History of Scottish Forestry*, 2 vols. (Nelson, 1967).

Bane, A.R., *The Secret History of Mistletoe* (Holiday Legends and Lore Book 1, 2011).

Coitin, Niall Mac, *Irish Trees: Myths, Legends & Folklore* (The Collins Press, 2003).

- Hageneder, Fred, *The Heritage of trees: History, Culture and Symbolism* (Floris Books, 2001).
 Miller, Joyce, *Myth and Magic: Scotland's Ancient Beliefs and Sacred Places* (Musselburgh: Goblinshead, 2000).
 Milien, W. and S. Bridgewater, *Flora Celtica* (Birlinn, 2004).
 Roger, Donald *et al*, *Heritage Trees of Scotland* (Forestry Commission Scotland, 2006).
 Scott, Alistair, *A Pleasure in Scottish Trees* (Mainstream Publishing, 2002).
 Strutt, Jacob, *Sylva Britannica*. Published by the Author, 1830. (京都・ヘートルダム女子大学図書館蔵)。
 Zucchelli, Christine, *Sacred Trees of Ireland* (The Collins Press, 2016).
Plant Names Explained: Botanical Terms and Their Meaning, Forwarded by Andrew McIndoe (David and Charles, 2005).
Scottish Wild Plants, Edited by Norma M. Gregory (The Stationery Office Limited, 1996).

ケルト文化

- Evans-Wentz, W.Y., *The Fairy-Faith in Celtic Countries* (Citadel Press, 1990).
 Gifford, Jane, *The Celtic Wisdom of Trees: Mysteries, Magic and Medicine* (Godsfeld Press, 2000). シェーン・ギフォード『ケルトの木の知恵』井村君江訳 二〇〇三年 東京書籍。
 Jones, Francis, *The Holy Wells of Wales* (Univ. of Wales Press, 1992).
 Joyce, P.W., *Old Celtic Romances: Tales from Irish Mythology* (Dover, 2001).
 Koch, John (ed.), *Celtic Culture: A Historical Encyclopedia*, 5vols. (ABC-CLIO, 2006) 国立国会図書館蔵。
 Proinsias, MacCana, *Celtic Mythology* (Hamlyn Publishing Co., 1970). プロインニャス・マッカーナ『ケルト神話』松田幸雄訳 二〇〇一年 青土社。
 Rolleston, T.W., *Celtic Myths and Legends* (Dover, 1990).
 Vescoli, Michael, *The Celtic Tree Calendar: Your Tree Sign and You* (Souvenir Press, 1999).
 井村君江『ケルトの神話―女神と英雄と妖精と』(ちへま文庫)。

ヴォルフ・データー・シュトル

『ケルトの植物』

手塚千史ほか訳

ヴィーゼ出版

二〇二二年。